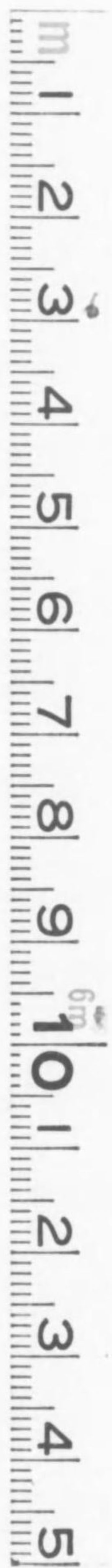


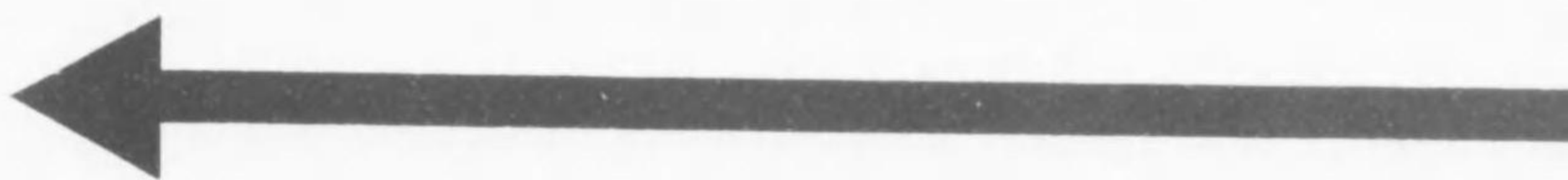
特252

778

三河の園女



始

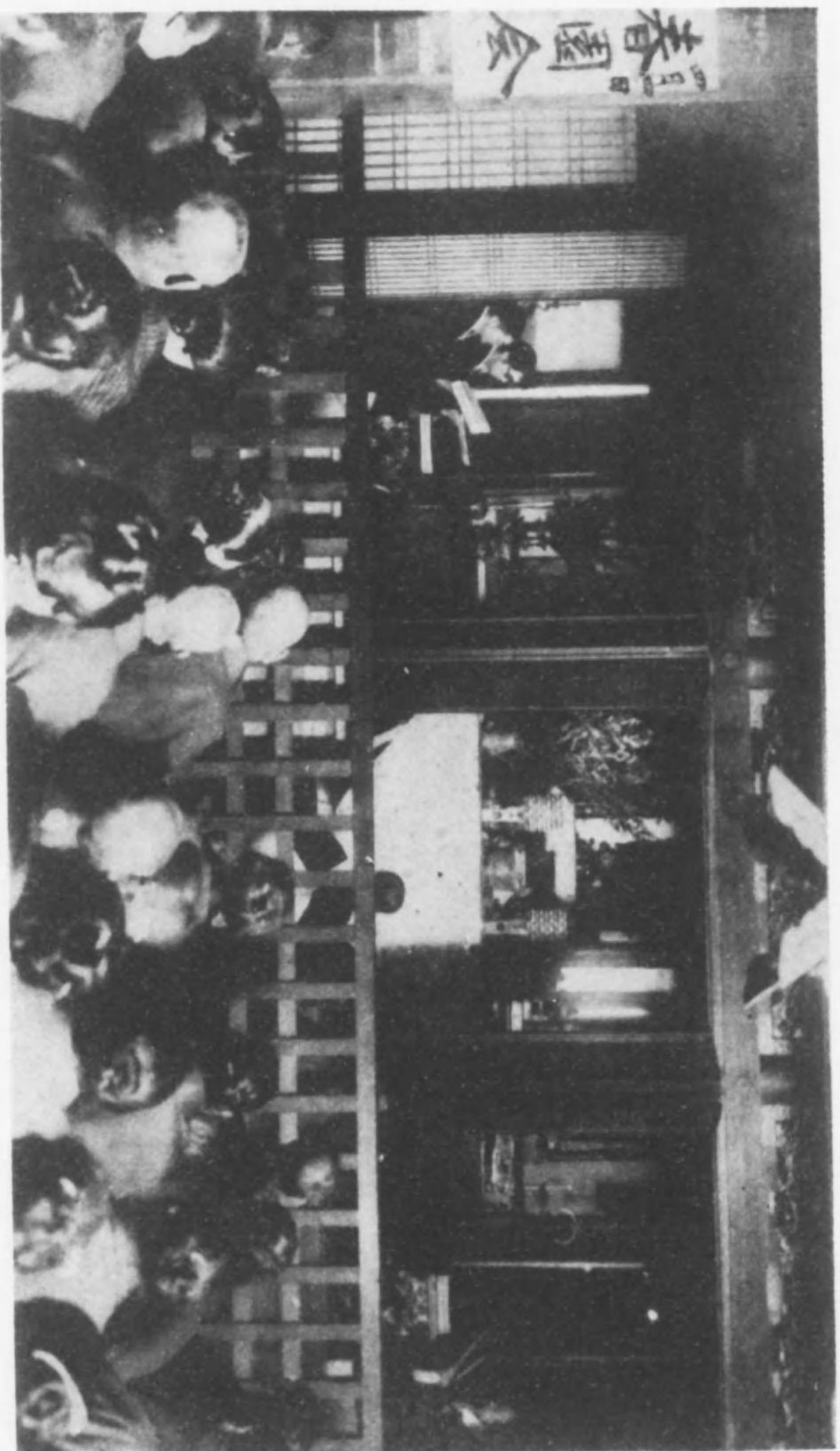


特252
778



園
女





春園會四月四日女園命日法要

三河の園女

伊 奈 森 太 郎

三河の園女といへば、眞宗に於ては、江戸時代末の信仰の人として、知らぬ人もない程有名な人でありました。依て幕末に眞宗の人によつて編纂せられた妙好人傳といふ有名な本の中にも、其の人ありと知られて輝いてゐます。

私が茲に改めて、この有名なる信仰の人、園女を語らうと思ひますのは、女性の鑑として、昭和の今日から、再び調査をしながらして、所謂再検討をして、ますます園女の偉大なる處を御紹介し、婦人の修養に資したいからであります。

◇

元來園女は只信仰の人といふことによつて輝いて居るのでありますが、この園女の生んだ子に、我が國尊王開國の先覺者であり、我が國兵制改革の先鞭者であつた勤王の士、贈正五位鈴木春山のあることを知らぬ人が多いと思ひます。尙又名古屋で扶桑新聞社を經營し、新聞界の先輩

として功勞のあつた鈴木才藏其の人が、園女の曾孫であつたことを知る人も少なからうと思ひます。

二

園女は安永三年三河國渥美郡浦村に生れました。浦村は今では田原町大字浦となつてゐます。この浦に今も八木覺左工門と申す家がありますが、徳川幕府の時代にも同じく覺左工門と申しました。園女はこの家の生れで、田原藩醫の鈴木玄通に嫁いで春山を生んだのであります。

玄通は號を愚伯といひ又櫻居居士とも申しました。渥美郡野田村の西園寺住職本多氏の女を娶つて庄之進といふのを生みましたが、庄之進は幼き中に死亡し、後又本多氏も離婚となりました。そこで園女が後妻となつて一代の奇傑鈴木春山を生んだのであります。

浦村は田原の町の北方一里、渥美灣に沿つた農村で、村民は皆農と漁とを業としてゐました。園女の家も貧しき農家で漁業を兼ねた生活をしてゐました。園女の容貌はあまり美しい婦人ではなかつたらしいが、身體は強健であり、其の心ばせは農家に珍らしい賢女でありました。依て遂

に玄通に望まれて後妻となつたのであります。偉大なる先覺者鈴木春山が出現したのも、この母があつてこそと思ふ點が多いのであります。

園女が玄通の後妻となつたのは何歳か確かにはわかりませんが、春山を生んだのは享和三年で二十八歳の時でありました。この時玄通は二つ違ひの三十歳であります。お産は園女の生れた里の八木覺左工門の宅でいたしました。一世の偉人鈴木春山の誕生地は斯くして田原町大字浦となるのであります。

園女が春山の養育振について其の一端を申述べますならば、春山が六七歳の頃であつたであらうといはれますが、路傍の畑から豆を採つて来て、之れを弄んでゐますのを見て、母の園女は大變な立腹で、春山をば一室に召び入れて厳しく責めていふには、「お前も子供とはいひながら、武士の子である。人の晶の物を採り來るとは何事ぞ、父の顔を汚し家の恥ともなる。母が百姓生れであるから、其の子迄も其の心がいやしいといはれてはなさけない。よろしく立派に腹をきつて申開きをするがよい」と、短刀をとりて春山の前につき出し、いやがる春山を捕へて厳しい折檻であります。丁度其の折診察を受けに来てゐた人達が何事かとのぞいて見ると、短刀をさしつけ

三

て自ら腹をきらなければ突きさしてもやり兼ねまじき勢を示して居ますので、これは一大事と其の人達が春山の爲に謝罪して如何様にも其の事を治めたといふことが、古老の話題に残つてゐます。園女の春山に對する教養振はこれを以ても、其の大意を察することが出来ます。



春山は小さい時知覺の發達が甚だ遅くて、おまけに容貌が甚だ滑稽で、見るものは皆之れ全く生れつきの馬鹿者であると思つてゐました。そこで人々は春山を馬鹿者あつかひにするけれども、本人は少しも氣にかけないで、たまく／＼からかふものがあれば、大聲一喝を加へて平氣で居ります。夫れが世俗の馬鹿と違つて大きな處の見えないでもありませんが、母の園女の心を痛めたことは一方でなかつたのであります。

春山が藩校の成章館に入つて學ぶやうになつても常にぬぶりをしてゐて、學問に氣のないやうでありました。園女はこれを見て、自分が百姓生れである爲に、こんな子が生れたのでは無いかと人知れぬ涙に咽んだのであります。

けれども母より受けた偉大なる素質は輝いて参りました。十一、二歳の頃から將來ある男兒として人にもみとめられるやうになりました。春山は二十歳の時長崎に留學して蘭學を研究し、歸

郷後江戸に出で、巢鴨の三宅友信の邸に参り、其の配下に於て渡邊崋山、高野長英、小關三英等と西洋事情の秘密研究をし、共に尊王開國を叫びて、明治維新先覺の士となり、ことに西洋兵制の研究をなし、兵學小識四十五卷、三兵活法十卷、海上攻守略説五卷とを譯述しました。是等の書は名のみ知れてゐて内容も冊數も完全に知れてゐませんでした。昨年五月春山の九十年法要を東京小石川の菩提寺寂圓寺で行ひましたのに前後して、各所から發見せられて、今は春山の兵制に關する譯述の殆ど全部が知られるやうになり、目下春山のお孫の鈴木きく刀自や其の妹婿の阿波章介氏の依頼によつて陸軍教授の佐藤堅司氏が春山全集編纂に着手してゐます。春山は大正二年十月十七日に贈正五位を賜はれてゐますが、春山の偉大なる處は、今日に至つてますます輝いて参りました。園女がこの偉人を生みこの偉人を養育したこと丈でも園女の功績は光つてゐますが、更に園女を偉大ならしむるものは其の信仰であります。



園女が信仰生活に入つたのは何歳の頃であるか、それも確かにはわかりませんが、春山十一歳の時母の園女に連れられて京都本願寺へ参詣の途中、關ヶ原で休憩しました折、春山は路傍の岡に登りて山河の地形を眺め、つくねんとして立つて居たので、母の園女が佐んで之れを問ひます

と、「兵家の勝敗は固より地勢による譯でもないが、徳川氏がこの一戦によつて三百年覇業の基を定めたことを思ふと、感慨無量なるものがある」と獨言のやうに叫んで側に居合はした道づれの人々を驚ろかし、世にも稀なる神童であると譽めはやされました。母の園女もこの時始めて、吾が子は馬鹿者でない、將來ある人物であると思ふやうになつたといひます。

この話は、十一歳の春山が偉人として而かも兵學家としての眼を開いたときであるとも考へられ、春山一代の劃期的事實として有名であると共に、園女が既にこの頃信仰生活に入つてゐたことを證する事實ともなるのであります。

春山十一歳の年は文化八年で、園女が三十八歳の時であります。春山は初めての參詣でありませうが、園女は既に幾年かの前から信仰の人であつたと思はれます。三十八歳の母と十一歳の少年とが脚絆と草鞋で足こしらへをして遙々山を越え河を渡りて、三河の田原から京都へ參詣に旅立つて居る處を想像するだに、其の信仰の一方でないことが思はれます。園女は自分のみならず。少年の吾が子をも信仰の人たらしめんとして斯く精進を共にしたのであります。園女は毎年幾回も田原から京都へ參詣に出かけますので、月まわりをしたとさへいはれてゐます。天保九年園女六十五年に夫玄通がなくなりましたが、其の以後の信仰活動は一入大きいもの

がありました。



園女が三十代から八十歳まで五十年にわたる、この信仰生活は沿道の人にもよく知られ、其の感化を與へたことが大きいといはれてゐます。

美濃の沿道の或村で、園女が或信者の門前を通り過ぎますと、其の家の家内がこれを見つけ、「あゝ今田原のお園さんが通る」といひました。平素園女を慕つて居る其の家の主人は走り出て見ると、モウ遙か向うに行く園女の背姿が見えます。それで後を追ひかけて「お園さんくどるか一言きかして下さい」と聲をかけました。園女は振り返つて「モウ思ふことも言ふこともいりませぬゲナ、如來様が助けてやると仰しやつて下さいますゲナ」と言ひ捨て、後をも顧みずサツサと往つてしまつたといひます。

この話は沿道の人が園女を知つてゐた一例に申しあげましたが、其の信仰の極意をうまく教へてゐます。



斯ういふやうに、園女に関する信仰物語は澤山に遺されてゐますが、本日はこゝに其の一二を

ぬき出して申上げて見ます。

八

園女の團子汁の談合といふのが名高いものでありました。若い女同行などがいつも談合の席で「お園さんくも一度團子汁の話をきかして下されや」と乞ひますと、園女はいつも嬉しさうに語り出すのであります。「あの夕方になりますと女中がお汁を拵へて、それへ團子を入れて下から焚き立てますネ、すると團子に煮える気はないけれども、火の力でひとりでに煮え上りますネ、煮え上つたと思ふ頃にはすぐ掬ひ上げて下さりますよ」と、自分が如何にも團子のやうなもので、光明のお蔭で救ひ上げられる姿を論じたものでありますが、これを園女の口から聴けば如何にも有難く聞かれて、いつも若い人々を歡ばせたといふことであります。

又或時越中の圓満寺の和尚が三河へ出張して、七日間の御法話をせられた時、園女は一座も缺かさず聴聞してゐました。

いよくお訣れとなつた日に、園女はお座敷へ罷り出で、和尚に向ひ「永々御懇ろの御導き有り難うござりましたが、此の園は何もかも残らず忘れてしまひました。どうぞ御形見にタツター一言お聴かせにあづかりたうございます」と申上げました。時に和尚は稍暫く黙つて居られました

が何と思召してか突然の仰せに「お園や、聴けば此頃矢矧の橋が流れたさうなのう」、園女は對へて「ハイ左様でござります」和尚はかさねていひました。「あの橋は流れさうもない丈夫な橋であつたがのう」、園女は「さればでござります、此度は非常の洪水でありまして、あの丈夫な橋もトウ／＼流れてしまひました」と答へました。和尚は言葉を強めて「さうか、非常の洪水で橋は流れたか、お園、それでも天上から映つて下さる月影はヨモヤ流れはせぬであらうがや」と仰せになると、園女は莞爾として、「御助けの月はマンマと映つて下されました」と申上げました。これを見たい和尚も微笑まれながら、「物には滓の残るといふことがあるものぢやが、滓ものこさぬやうに聴聞したいといふは其の事ぢやのう」と、お賞めになつたとのことでもあります。

又或人が園女に向つて「一心一向といふことをきかして下され」と尋ねましたのに對して、園女は對へて「一心一向に彌陀をたのめとは仰せられますが、園は存じませぬ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……こんなことぢやさうにござります」というてゐたといひます。

只々念佛を申すことによつて、其のまゝに佛にすくはれるといふ園女の信仰は、貴いものであります。いふこと／＼に信仰は記憶や理屈にないといふことを暗示してゐます。

九

園女はいつも同行の間を廻りて、無我なる歡びに多くの人々を佛法に引入れ、また御本山へ御取持などを勧めてゐました。一世の偉人たる春山は四十六歳を一期として弘化三年園女七十三のときになくなりました。園女は夫の菩提をとむらひ、わが子の冥福をいのり、ひたすら老の身を佛にさゝげ、嘉永六年四月四日八十歳を以て大往生をとげました。法名を釋尼妙果と申し、田原町龍泉寺に其の御墓があります。龍泉寺では毎年四月四日、春園會と稱し法要が行はれてゐます。

園女の信仰に導かれて大きな感化を受けてた人に、貞信尼といふ人があります。園女が七十六七歳の時であつたらうと思ひますが、自分の餘命幾許もないことを知り、自分が居なくてもお取持の出来る相續人をと求めて、其れには貞心尼より外にはないと見込み、當時二十一、二歳の貞信尼を連れて、知りあひの同行へ一々顔見せに歩いて「わし同様にどうか頼みます」と言つて廻つたといひます。

貞信尼は越後國中蒲原郡新關村かんせきに生れ、俗名を本間ゆきといひ、一度他に嫁いだことがありま

すが、病氣の爲に離縁となり、十九歳で剃髮して貞信尼と稱し、一生を佛門にさゝげ、明治四十四年八十三歳でなくなりましたが、大きな感化を受けた人だけに、貞信尼によつて傳へられてゐる園女の信仰の話が多いのであります。

園女の信仰が貞信尼始め多くの人々を導いて感化を與へた力が大きく、信仰の人として永劫に輝いて居る園女が、又偉人の母として百世に輝くことを思ふとき、婦人の信仰心が子女教育に大きい力あることを思ひ、「偉人は信仰の心深き母から生れる」と叫んで本日の講演を終ります。

昭和十一年六月廿日印刷
昭和十一年六月廿五日發行

【非賣品】

名古屋市中區鹽付通六丁目十二番地

著作人兼 伊奈森太郎

名古屋市中區千種町五反田五二番地

印刷人 小池清彦

終

